

洋食の今昔／食べるお茶・ミエン

池田 錦七（昭和9年応化卒）

洋食の今昔

時代は大正の中頃。私は東京の場末、山の手・新宿に程近い和田村で幼少期を過ごしていた。

都内の内藤新宿から分岐する青梅・甲州両街道は、未舗装の砂利道で、引切りなしに荷馬車、荷車、それに混じって人力車が行き交う幹線路だった。自動車の時代ではなかった。

中央線と山手線の接点は新宿。飯田橋を起点とする中央線は、新宿の次駅・大久保で分かれ、中野・吉祥寺駅と長距離区間、和田村からは杉並村を通過して中野駅へ、都心へは新宿に出た。

当時、邑人（村の人）が少ないから、何家の誰だと即座に分かるほど親近感があり、赤毛の外国人は珍しかった。私たちは、外国人を「異人さん」と呼び、あの彼女（ひと）は「ハイカラさん」だといっていた。今思えば、その真意、「high collar」とは「丈の高い襟」のことであり、これが西洋風を気取ったことをいい、新しがりやのことであつたかと。また、他説では、婦人の日本髪を洋髪に変えた彼女（ひと）をいったとも。

その頃は、まだ主食は日本古来の菜食であつた。ぼつぼつ西洋料理として取り入れたのが三越の食堂で、カレーライスとハヤシライスが登場した。そして、都内の盛り場には「カフェ」が店を張り、私の村にも「田川」というカフェが開店した。白いエプロン掛けのお姐さんが客の相手をし、賑っていた。

子供心に、洋食とはカレーライス、ハヤシライスとカツレツをいうものかとも思っていた。その「ハヤシ」とは、日本名か外来語か、また何を意味するのかも知らない。

後年、hash rice が「ハヤシライス」といい、その内容は、肉や野菜をトマト味で煮込んだ「ルー・roux」をご飯の上にかけて料理だと知った。そのルーとは、小麦粉をバターで炒めたもので、仏語である。ハヤシライスは渡来の洋食だ。だが、ライスは東洋人の主食、ルーはフランス、トマトを煮込むのはドイツ料理…。ハヤシライスとは、世界を駆け抜けて日本に定着した料理かもしれない。私の大好きな料理の一つに加えておく。

西洋料理には、もう一つカレーライスがある。パ

ン食ではない「ライス・米」というからには、東洋料理に違いない。

子供の頃、カフェでは一皿30銭。大衆食堂で15銭。私の在学した横浜国大の食堂では、10銭で食べさせてくれた。その様は、黄色で泥状。味が辛いから「カレー」というのかと子供心に思っていた。

元来、東南アジアには、カレー料理・TAMIL or KARI が定着。それがいつの頃か、日本独自のカレーライスが生まれている。いち早く横須賀海軍が軍隊食に採用したのが、民間に普及して日本食になってしまった。

「カレー」原点の解釈はこうである。素材の肉や野菜から抽出されるエキス。そのまろやかな苦み、甘さ、酸っぱさなどの五味が込み合う中に、「香味」と「辛さ」を加えた「醬」のことをいう。

後年、私はその原点が知りたくて、香辛の南方圏へ旅をした。マレー半島では、首都・クアラルンプール、ペナン島、東海岸のクアンタンからヅングン、コタバルへ。大東亜戦では、緒戦の激戦地であつた街へ。

南下すれば、マラッカを経て、シンガポールの自由都市、印度街にも足を運んだ。

ここからボルネオ島の一角、世界一の金持ち国・ブルネイへ飛び、口にしたカレー。

インドネシアは香辛の宝庫。消費地はジャカルタや中部のジョグジャで、カレー料理を味わった。

バリ島は俗化した。私はウォーレス・ラインを飛び越えて、日本人が行かないロンボック島へ。節を変えて、かつての名称・セレベス島へ。ここからモルッカ諸島は、世界の香辛産出国として巷間に知られている。私は、さまざまな香辛料を生む植物を見聞した。そして味わってみた。

ある時は、漢方の宗国・中国へ。カレーの脇役の素材を訪ねての旅。広東省から北方へ。雲南省都の昆明、石林は薬種の本場。ここから四川省の成都・重慶の大都市へ飛んで、数え切れない薬種・香辛を見て驚いた。また、香辛の旅は国内にも多い。

食べるお茶・ミエン

数年前のこと。私の好きな仏教国・タイへ、寺詣

りを兼ねて少数民族を訪ね、珍奇な物事を見聞してきた。

首都・バンコクのドン・ムアン空港へ。さらに北方800kmの古都・チェンマイへ飛んだ。ここでプロペラ機に乗り換えて、さらに奥深く県都・チェンライへ。お目当ての山岳民族・アカ、ヤオ族の集落へ。そして車は、北方の「メーサイ」へ走った。

ここは、ビルマとラオス、タイ国との接点、国境の街であり、巷間では「黄金の三角地帯」として名高い。小丘に佇む。源をチベットに発する「メコン」の大河は3国を分け、悠久の流れとなって下っていた。

旅人は私たちだけで、街中はタイ人、ビルマ人と山岳民のヤオ、アカ、メオ族や中国、ラオスの人たちでごった返していた。

観光地ではないが、交易の街なのか、土産物店、雑貨店、食堂に混じって、世界最上級の「翡翠」（ビルマからの密入品）を加工・売買する店があった。わが国に着いた時は、何倍になるだろうか。

ふと隣を見ると、束にした干した葉っぱがあった。問えば「ミエン」だという。食べる「お茶」だとのこと。分からぬままに、旧都・チェンマイに舞い戻った。どこか京都に似通う佇まい。13世紀にメンライ王が都と定めて開国し、20世紀に至るまで600

年もの長い間、王室を守り続けた伝統が、ここかしこに色濃い影を落としている。

ここで世界でも珍しい食べるお茶「ミエン」に出会った。ビルマからタイ、ラオスの三角地帯の山間部で、茶の葉を食べる習慣がある。食べる時の飲料は「水」であり、その水を飲みながら「タバコ」を燻らし、ミエンを食べる。これは飲料ではなく食物である。私はそのマナーを知らなかった。

その茶樹は、喬木性のアッサム型で、日本茶と違って葉が大きい。木に登り、一枚一枚葉先から3分の2摘み取ったのを持ち帰り、ヒゴで結わえる。この束を「ハイ」といい、湯のたぎる釜の上にかけて、1時間半くらい蒸す作業にコツがある。

蒸し上がれば、床に広げて冷まし、くずれ直しの後、内側にバナナの葉を敷いた竹籠に隙間なく詰めて、足で踏み締め密閉し、貯蔵中に「醗酵」させる。

私は、チェンマイの中央広場まで出かけて、一束を求めた。

水瓶とグラス、タバコ、一束のミエンでワンセット。ミエンひとつまみに岩塩少々、噛み締めながらタバコの順。ホテルで2～3の友と食べてみた。ちょっと渋味があり、さほど美味とは思えないミエン茶であった。

Planned Happenstance (プランド ハプンスタンス) 随想 [第5話] お大師さんと金毘羅さん

藤平 正氣 (昭和44年応化卒)

はじめに

人は誰しも、両親や生れ出る物語、そして出生地を選択できない。これらとの出会いは、正に太古から先祖代々による偶然の積み重ねの結果であり、神のお導き、神のみぞ知る運命としか言い様がない。どうしようもない血のつながりや本人達が意識できなかった体験について、多くの有名人や偉人が、その良否功罪を後付けで評価した例をよく見聞する。一読しても、自慢と謙遜、好感と嫌悪、感謝と無視、肯定と否定等が渦巻いて、人それぞれの複雑な胸中を推察できるが、衆生皆本性凡夫の感が強い。

我々は、物心がつくと同時に、両親の存在を意識する。しかし、その有難みはよく分からず、長じて子を持ち育てることで初めて知る場合が多い。あの時は民族存亡の危機、日本国民すべてが生きるに懸命の終戦直後、それでも子育てを通じて両親も成長



していた。今そう考えると納得できる体験が多い。出生地での生活を無意識に受け入れ、概ねその日その時に流されて成長していく、普通人への始まりがそこにあった。

今回は、私の出生地である“四国は讃州那珂の郷象頭山金毘羅大権現・・・”，つまり、香川県仲多度郡への望郷と誇り、祈願の対象であるくお大師さん

>と<金毘羅さん>との遭遇運命、そして、その後のPlanned Happenstance（以下PHと称す）によるつながりと拡がりを辿りたい。

<おだいっさん>と<こんぴらさん>

郷里讃岐の人々は、平穩無事な毎日を<お大師さん>や<金毘羅さん>に感謝し、ごく自然に手を合わせお参りしてきた。また、親しみを込めて、<おだいっさん>、<こんぴらさん>と呼んできた。この対句のような呼びかけが、幼少期から私の耳底に時折強く響くのである。

この世には不合理・不条理なことが多い。つまり、無理が通れば道理が引っ込むの類、そして、個人の地道な努力を瞬時に崩壊させる事故・事件・災害は、枚挙に暇が無いからである。しかし、暫時人々はこれらを非情な仕打ちと呪っても、思い直して苦悩や絶望から抜け出す方策を探り、さらなる人生を生き続けなければならない。気持が折れそうになる時、頼れるのは家族、そして隣組や地域での開け放された相互扶助、さらに“お助け下さい、お願いします、有難うございました”と神や仏におすがりし、元氣や勇気をいただき蘇える。

正に偶然、私は、<おだいっさん>の善通寺市で生まれ、訳有って<こんぴらさん>の琴平町で幼少期を送り、さらに都合で善通寺市に戻り小学校5年修了時までを過ごした。

そして故郷を離れ、両親に随伴し日本各地を渡り歩き、高校卒業まで計7校の校風を体験することになってしまった。浮き草感を覚えた当時の私は、行く先どこも仮の土地・仮の学校と思い、特別の親しみを感じることはなかった。

そこで、讃岐への古里意識が高められ、育ての親を担った祖父母がなお健在だったこともあり、比較的早い時期に、“故郷は遠きに在りて思うもの”の感情を抱くに至った。

先祖代々が眺めた稲作の原風景、交わされた義理人情、営まれた風習や祭事が絶えることなく受け継がれていた“あの故郷あの讃岐”……。しかし、一方では、瀬戸内埋立て工場誘致や本四架橋以降、今では駅前や幹線道路沿いの風景は、日本各地どこへ行ってもよく似ている、という寂しさも感じながら……。

お大師さんと四国八十八箇所霊場

弘法大師空海<お大師さん>は、774年、四国讃岐国多度郡屏風浦（香川県善通寺市）で生まれ、入定が835年なので、今から約1200年前の平安時代初

期、真言宗の開祖として万人に真言密教の教えを説き、仏法の理論と実践を通じ、全国各地に実録と伝説的な偉業を数多遺された。

お大師さんは、その血筋や修学環境に順応し、すでに幼少期から自ら学び続ける態度や習慣を会得されたようだ。18歳から平城京で机上学問に励んだが、仏教の深淵広大な思想に魅せられ、四国各地の霊地でも難行苦行を積まれた。20歳で出家、22歳で空海と改名、24歳で「三教指帰」を著し、儒教道教仏教での仏法有理を説いた。

そして、お大師さんは、最初のPHを体験された。つまり、奈良久米寺での「大日経」との遭遇である。お大師さんは、このお経を完全に理解するため入唐留学を決意された。31歳で遣唐使船に便乗入唐、長安に到り修学に入られた。半年後、お大師さんは、二度目のPHを体験された。真言密教の正統の教えを継ぐ青龍寺の恵果和尚との遭遇である。入唐二年、お大師さんは、33歳で、“虚しく往きて満ちて帰る”の満願成就で帰国された。

後に815年、お大師さんは、四国八十八箇所の寺々を霊場とした選定された。江戸時代の高野山修行僧がこれら札所に番号を付けたらしい。発心阿波・23寺、修行土佐・16寺、菩提伊予・26寺、涅槃讃岐・23寺と巡拝する、全行程約1,400キロに及ぶお遍路さんである。真言宗各派から80寺の他、真言・時宗1寺、天台宗4寺、臨済宗2寺、曹洞宗1寺も札所に名を連ねる。

善通寺市域には、第72番・曼荼羅寺、第73番・出釈迦寺、第74番・甲山寺、第75番・善通寺、第76番・金倉寺と5つの札所がある。特に、善通寺と金倉寺は、小学校低学年の遠足、社会科郷土歴史の勉強、お祭りや例年行事でご縁が深く、広い境内を駆け回った記憶が私にも蘇える。

南無大師遍照金剛と南無阿弥陀仏

掲題2つの帰命頂礼も、幼少期から私の耳底で、一念として等しく共鳴してきた。

お大師さんは、讃岐にある日本最大の灌漑用溜池、満濃池の改修工事を指揮され、仲多度郡の農民達を助け、水田稲作の発展に貢献された。溜池のゆる抜き放流や満濃用水を我が田に引入れる時、稲作農民達は自然なかたちで手を合わせ、“南無大師遍照金剛”とその遺徳に感謝したものである。昭和30年代頃まで、郷里の農作業でよく見られた日本の原風景であった。教義や説法のみならず実践による恩恵は、仏教の宗派を超えて強く支持されてきた。

一方では、物心がついた頃から、“南無阿弥陀仏”

も私の耳にはよく聞えてきた。真言宗善通寺派総本山のおそばなのに、なんと藤平家は、浄土真宗本願寺派具足山本正寺の門徒であった。江戸時代の宗門改や明治維新の神仏分離・廃仏毀釈の影響なのか？時の為政者の統治都合により、先祖が一部落一寺に再統合されたのか？無条件に強制されたのか？それとも、法然・親鸞の流れと教え、阿弥陀仏が我が名を唱える凡夫すべてを浄土に迎え仏にしてくれる、この有難い約束、そして、お念仏を優先すれば普通人にも仏の心が芽生える、という信心(まことのこころ)に生きる術を悟ったのか？

ところで、この6年、諸般の事情に翻弄された私は、禅宗二経と真宗二経を毎朝お勤めするのが日課となった。その結果、四経共通の信心として、『寂滅必定・随所青山・当处念仏』という四字熟語三つを自作し、熟年人生の拠り所と意識する昨今である。

2011年は、法然800回、親鸞750回の大遠忌法要年にあたり、菩提寺ご住職の先導で、本年4月、築地本願寺でのミニPHも体験できた。

金毘羅さんと栄枯盛衰

金毘羅さん(金刀比羅宮)は、主祭神を大物主命とし、香川県仲多度郡琴平町の象頭山中腹に鎮座する神社で、全国各地にある金刀比羅神社・琴平神社・金毘羅神社の総本宮である。

さて、これも運命である。母方祖父母は、明治時代から金毘羅さんの裏参道口に住んでいた。私は、生まれてまもなく、訳有って祖父母に預けられ、幼稚園卒園まで養育を受けた。教職に在った祖父は、郷土史の調査研究にも熱心で、折節の帰郷時、勤王志士と明治維新の他、ものあわれや栄枯盛衰の事例をいくつか聞いた記憶がある。

人々は、家族健康、商売繁盛、交通安全等を神や仏に祈願する。しかし、祈願される神仏も栄枯盛衰の大波を被ってきた。祖父の言によると、金毘羅さんも例外ではなく、この神仏習合の寺社は、神仏分離・廃仏毀釈の歴史難儀も巧みに乗り越え、今日の繁栄と崇拝を獲得した。江戸時代に定着していた庶民の金毘羅参りのエネルギーが、歴史難儀をも完全に押し流した感が強い。その結果、金毘羅を鎮守神として祀り金毘羅大権現の由緒につながり、かつ、繁栄の端緒を担った象頭山松尾寺金光院は、表舞台から押し流されてしまった。松尾寺と金刀比羅宮の確執、そして松尾寺の敗訴は、神道日本の思想に影響された結果で、臨戦団結の英雄として再評価された空海の念力もついに及ばなかった……。現在の松尾寺は、旧松尾寺の塔頭であった普門院が、象頭

山南東麓で法灯を継承してきた。

神仏御座す寺社の栄枯盛衰も、結局、それらを信仰・支持する人々の都合や世渡り次第に影響されてきた、虚無の話しである。

金毘羅参りとお山信仰

こんぴらさんは、明治維新の神仏分離により、金毘羅大権現から金刀比羅宮に改称し、神道の神社になった。しかし、神仏習合時代や仏法の守護神・薬師十二神将のおひとり・宮毘羅大将あるいは金毘羅童子の由緒・影響が強く残る。つまり、人々の呼称や関心は、こんぴらさんであり金毘羅参りであり、それらは江戸時代から変わらずである。金毘羅神は、航行の安全祈願と無事感謝の海神として、さらに交通安全にも拡がり、全国的な信仰を集めている。

さらに、こんぴらさんは、極めて絶妙な立地に御座す。参拝する社殿は、象の頭のかたちをした象頭山の中腹に在る。象頭山はインドにもあり、仏教開祖の釈迦牟尼とご縁が深い。象頭山は、瀬戸内海の船々から讃岐平野を越えて遠望できる「お山」である。讃岐平野に住む人々は、仕事の手を時折休めて、象頭山を拝み見たことであろう。

こんぴらさんにはケーブルカーもロープウェイも無く、本宮までは785段、奥社までは1,368段、石段をひたすら登ってお参りする。高齢者にはかなり厳しいお参りだが、流し樽を担いだ屈強な海人は、一気に駆け上がり代参する。

また、私の幼少期、こんぴらさんの神域は、格好の遊び場所でもあった。夕暮れ時、沢水を辿って薄暗い森林に入り込み、神霊や物の怪らしき陰影や「お山」のざわざわを感じ、急いで逃げ帰った体験もあった。小学校高学年には、善通寺側から旧陸軍射撃訓練場を通り、象頭山の東面中腹を辿りこんぴらさんの奥社に到り、1,368段の石段を下る途中で本宮にお参りする、という遠足の定番コースがあった。

ところで、本年6月、富士山が世界文化遺産に登録された。関東東海甲信から遠望できる四季折々の富士山は、孤高秀麗、古来絵になる存在で、人々から富士の「お山」として信仰を集めてきた。お山信仰と物見遊山は、現代のウォーキングや癒し旅の源流を成し、レジャーにもつながるその多面性が強く支持されてきた。

古来、仰ぎ見る自然は、畏怖畏敬すべき神々であった。大木・大岩・大滝、そして日本各地にある「お山」も然りである。

おわりに

故郷に残っていた家屋敷や先祖伝来の田畑は、両親の時代に処分された。しかし、私が、本籍地、菩提寺や先祖代々の墓を郷里讃岐に残しているのは、両親の生前意思のみならず、やはり、〈おだいっさん〉や〈こんぴらさん〉への祈りやご縁を大事にしたい心情に他ならない。

偶然が度重なり、それらの功罪によっては、無関心や絶望あるいは達観してしまう。今回のような話しは、誰しもが抱くような感慨である。できれば、これらの運命を自分の人生の中で前向きにつなぎ抜けることで、次なる新たな出会いや展開、つまりPHや功德にも遭遇できる……。人生とは、不可称・不可説・不可思議なものであるが、生きるに足る価値ありと思いたい。

なお、今回の〔第5話〕の締め括りとして、郷里への調査旅行を予定していたが、本年5&6月、2回の入院手術を余儀なくされ、残念ながら実行できなかった。郷里の友人知人に私の認識や調査結果をお話しし、ご意見を伺い見直す機会は当分先送りになってしまった。(平成25年7月15日 記)

参照図書等

- ① 西條耕一執筆『仏法遙かにあらず、心中にして即近し』読売新聞(2013年6月23日)
- ② 阿満利磨寄稿『絶望無関心超える道／法然親鸞今問い直す意味』読売新聞(2011年2月7日)
- ③ 高野山大学選書刊行会編『第5巻・現代に生きる空海』(株)小学館スクウェア(初版／2006年)
- ④ 宮坂宥勝著『空海／生涯と思想』(株)筑摩書房(初版／1984年)
- ⑤ 山本和加子著『四国遍路の民衆史』新人物往来社(初版／1995年)
- ⑥ 小野庄一著『七日で一県楽しく歩く四国遍路』朝日新聞社(初版／2005年)
- ⑦ 永田美穂著『日本人のための仏教ガイド』(有)大法輪閣(初版／2003年)
- ⑧ 鎌田東二著『神と仏の出逢う国』(株)角川学芸出版(初版／2009年)
- ⑨ 藤田健著『金刀比羅宮／こんぴらさんへの招待』筑摩書房(初版／2000年)
- ⑩ 近藤喜博著『金毘羅信仰研究』塙書房(初版／1987年)

サムスン退社と新たな出発

佐藤 登 (昭和51年電化卒, 昭和53年修士修了)

1. サムスン時代の新聞連載

2004年9月1日に韓国のサムスンSDIへ常務として就任し、8年4か月に亘って役員を務め2012年12月31日をもって退社した。

この間、2005年6月を第1回として毎月第一金曜に「東洋経済日報」に記事を連載した。2012年11月までの7年半の長きに亘って90編に至り、活字数にすると約15万字に及んだ。

韓国の研究所で5年間、主にエネルギー関連の研究開発を先導し技術経営を担った。そして2009年9月からは経営戦略部門に異動と同時に東京へ戻り、3年4ヶ月の期間は日本の幅広い人脈ネットワークを通じて、さまざまな仕組みや仕掛けを構築し、ビジネス領域の拡大を図った。この経験から技術経営のビジネスセンスの向上にも繋がった。

この連載を継続するにあたり様々考えたのは、原稿になるネタが毎月のようにあるかという心配であったが、アンテナを張り巡らせ自ら行動することによって結構あることに気付いた。

さらには、ガリレオ・ガリレイが言う、「書きとど



めよ、議論したことを風の中に流してはいけない」という台詞に共感発奮し、自ら考えて行動し分析したこと、体験したことをこれまで綴ってきた。

東洋経済日報の連載をここまで続けてきた過程での有用性は大きく三つあった。ひとつは、記事内容に関係のある取引先や知人に読んでもらうことで、韓国のビジネススタイルや文化慣習について多くの方々に理解いただいたこと。そのような繋がりから本紙購読契約をした企業もあった。

二つ目は、そのような理解から更に発展して実際のビジネスに連結できたこと、特に素材系企業との連携

やビジネスモデル創りで実績を積み、電池業界での交流、また自動車業界との直接交流や協議、あるいは製品展示会なども実行に移すことができた。

三つ目は、自身の原稿執筆スピードが向上したこと、そして飛行機や電車などの移動時間での取り組みをすることで時間活用術が向上したことである。限られた時間をどう活用するか、本業の効率を上げるための工夫、休日のオフ時の時間活用方法など、その効果は計り知れず時間の大切さをますます痛感している。

2. 2013年の新たな出発

2011年には名古屋大学の教授就任のお誘いを受けたが、サムスンでの業務が途中段階のものもあった関係で、ご丁重にお断りした経緯がある。代わりに現在は、名古屋大学・グリーンモビリティ連携研究センターの客員教授と大学院工学研究科マテリアル理工学専攻の非常勤講師を務めている。大学主催のシンポジウムなどでの講演、学生への講義と産学連携の研究開拓などで関わっている。

そして、これまでキャリアとして積んできた自動車業界、電池業界、素材業界に絡まる分野で、産業界の立場からも仕組みや仕掛けを創出できるようなビジネスに技術経営的視点で取り組んでいる。

具体的には、環境試験機器メーカーのエスベック社（以前はタバイエスベック）のエグゼクティブアドバイザー、電池業界再編検討会のメンバーとして客観的に意見を言う立場での参画、講演や執筆活動など、複合的な動きをとっている。

昨年までは日本企業から韓国企業へ移籍して経営的視点から携わって日韓の橋渡し役となる協業や交流を実現してきたが、今年からは日本国内を拠点とした更なる取り組みと研鑽に繋げている。

3. 日経ビジネスオンラインの連載開始

本年3月に日経ビジネスから、ビジネスオンライン（無料購読）への連載記事の依頼が寄せられた。もともとホンダとサムスンでの業務を通じてのキャリアをベースに、書籍出版を考えていたので、極めてタイムリーな依頼であった。「技術経営——日本の強み・韓国の強み」という大表題のもとで、4月19日からスタートしている。第7回の記事の一部をご紹介します。

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/person/20130401/245962/>

「技術経営——日本の強み・韓国の強み」

人事異動を本人に任せるホンダ、昇進が最大目標のサムスン

技術者のキャリアアップにおける両社の違い

2013年7月18日（木）

グローバル社会での昨今の動きを見ると、業種に関わらず個人のキャリアに重要な価値があることを認識させられる。日本においても、終身雇用という考えが徐々に薄れつつあり、優れたキャリアを持った技術者が転職をすることは決して珍しくなくなった。優秀な人材が流動することで、結果として企業が発展するケースも多くある。結局は「企業は人なり」ということなのであろう。

『日経ビジネスオンライン』の中にも「サムスンに多くの転職者を出した日本メーカーは？」という興味深い記事がある。同記事は、日本に出願された特許情報を分析することで、サムスンに転職した技術者の出身企業や得意分野を特定したもの。サムスンの技術発展には、日本の技術者が大きく貢献したことを明らかにしている。その中の一人が私なのだが、技術者として複数の企業に貢献できたのなら、それはキャリアとして誇れるものだと考える。

私の技術者としてのキャリアは、これまでの連載でも断片的に記してきた。第4回で紹介したように、ホンダにおける技術論議で本質を真剣に議論し、結果としては腐食問題の解決に貢献した。前回の第6回ではホンダの基礎研である当時の和光研究センターに異動し電池研究室を立ち上げ、電気自動車と電池開発に最初から関わった自前主義の事例について触れた。

筆者は、事業の最も下流における現場のエンジニアから、ホンダの最も上流の基礎研に異動した。キャリアという点では、ホンダ時代に順調に積み上げたと言える。私のキャリアアップの裏には、ホンダが持つ思想が明確に表れているように思う。今回はキャリアアップという視点で考察し、ホンダとサムスンの比較分析を行ってみたい。

会社にながら博士号を取得

中略

どこに行っても何をしてもよし

その後、当時の吉野浩行常務（後のホンダ社長）から呼び出しがあり、経過を聞かせてくれとのことで面会した。会うといきなり、「東大で学位を取ったと聞いたけど、仕事が暇だったんだね」と言う。すかさず反論して、「そんなことはないですよ。技術論議で闘っていましたよ。結局は私の提案が実用に結びつき、製品品質が向上し、クレーム費が激減して会社に貢献したことになります。併せて、何故こんな品質問題が起こったのかを科学的に解明したく、それができたという結果です。でもそういう人物が1人、2人いてもおかしくないと思うのですが」。すると吉野常務は

「なるほどそれもそうだ。ところで、今後どんなことをしたいの」と問いかける。

「クレーム費もなくなって製品も市場から認められ、学位も取れたということで、この分野で今後も継続した業務をしても重箱の隅をつつくようなものです。できればこの分野を卒業して方向転換させていただきたいと思います。21世紀になれば、自動車は環境とエネルギーという大きな課題がのしかかってくるはずですから、今の時点で私がそういう準備をする業務に就いた方が会社に貢献でき、自分の更なるキャリアアップにつながると思います」と主張した。

吉野常務は、「そうか、わかった。ともかくいろいろな人と相談して自分で判断し提案してよ。どこに行っても何をしても良いから」と、なんて凄いことを言ってくれるのかと感動した。どこに行っても何をしても良いなど、そんなことは会社に入って聞いたことがなかった。あり得ないと思っていただけに、これには本当に驚いた。考え方のスケールがなんて大きい人だろうと。

その後上司、同僚、他企業の方達にも相談しつつ自分の考え方をすべて整理した。結局、新技術、新事業を開拓する本田技術研究所の和光研究センターへの異動を、鈴鹿製作所の当時の上司であったO工場長と吉野常務へ自ら提案した。1990年2月に、鈴鹿の地を離れ和光研究センターに赴任した。

このように本人に人事異動を好きなようにさせる経営の器がホンダにはあった。もちろん、すべての技術者がそうであったわけではないが、経営者の考え方一つであるとも言える。「成果を出しチャレンジ精神のある者にはチャンスを与える」という当時の吉野常務の考えと発言があればこそ。まさに経営者としての長期視点を垣間見た場面であった。

実績がキャリアを形成し、キャリアが次なる機会を得るという循環はあり得る。逆に言えば、成果を出さなければ次なる機会は訪れないということだ。そのためにもエンジニアとしては巡り合ったテーマと徹底的に向き合い、成果を出すことに集中すべきだ。例え、そこに上下関係の障壁が現れたとしても、それを打破する意思が必要だ。逆境や苦難を乗り越えて克服することでキャリアは形成される。

そこに至るまでには失敗もあるだろうが、それを教訓に新たな発展につながることもある。いずれにしても、エンジニア自身が何をどのように解決しキャリアを積みかかということになる。社内でのエキスパートになるだけでなく、社外や業界からも認められるエキスパートこそが本物のエキスパートである。

そのためにも、グローバル時代の現代はなおさら、

外部との交流、さらには人的ネットワークの形成による自身の周辺の器を大きくすることは必要だ。閉ざされた社内だけでの活動であれば外を知らないことになり、ともすれば唯我独尊の境地に至ってしまう。

形を気にするサムスン人

一方で、サムスンにおける技術者のキャリアアップのプロセスはどうか。第3回で紹介したように、サムスンでは最初の配属が専門性や希望を勘案して決められる。その後はトップダウンの命によって与えられるテーマに集中する。それがあまり意味のなさそうなテーマであっても、上司から評価されるために成果を出そうとするのは第5回で説明した通りだ。

せっかちな気質の韓国においては、課題や必要な調査、分析などが必要になれば時間をいとわず、がむしゃらに進める。よって上司の指示を短時間で遂行するために徹夜での業務になることも多々あり、よってサムスンは激務というイメージになっている。

本人のキャリアを形成してエキスパートとなって存在感を高めることよりも、サムスン人が新入社員の段階から目指すものは昇進をし続けて、やがては役員に任用されることだ。若手が成果を出せば昇進の機会は得られるが、必ずしもその分野の専門性を高めることに重きを置いていないのも実情だ。

一定の成果を出しつつ、ジョブローテーションを繰り返しながらポジションを上げていくケースが多く、特定の技術分野で第一人者になろうという考えをもつ者は少数派。その分、マネジメント側に寄ることで、昇進の機会が多いと考えるのも無理はなく、マネジメント系が強いサムスンとも称される由縁である。

基本的に人事異動を本人に委ねるような考えははなからない。異動に関する上下関係の協議もほとんどない。トップダウンの社会であるが故に、人事異動も完全なるトップダウン方式である。

社名にSAMSUNGがないと意味がない!

中略

肩書きに加えて“様”を付ける文化

中略

この会報が刊行される頃には、15回近辺の連載にまで至っているだろう。8月22日と9月5日の第9回、第10回のコラム記事（全体では1日20本以上が掲載）がアクセス件数20万件を超え、当日のアクセスストップとなったのには筆者も驚いた。ご参考にしていただければ幸いです。

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/person/20130401/245962>

S 43/2 卒 応化・機械合同「弘明寺会」箱根で開催

北島 惇夫（昭和43年2部卒）

応化と機械でかなり前から合同で毎年、同窓会を行っています。今年（平成24年11月19、20日）は応化10名、機械8名が箱根に集まりました。11月19日（月）に金時山に登り、広田君が手配してくれた仙石原「やすらぎの宿」で一泊しました。

大半が70歳となったせいか金時山はとともきつかったですが、その分、宿の温泉とビールが格別でした。宴会での近況報告や部屋での飲み会では、現役社長柴本君の経営哲学や、みなさんからの現状を打ち破ろうとする意見が多く出て盛り上がりました。添付写真はカメラマン奥原君撮影のものです。

来年も箱根開催が決まり楽しみにしていますが、毎年 幹事の山岸、町田興、鈴木君には大変感謝しています。



イトトリウム会報告（応化II・昭和44年卒）

イトトリウム会は毎年同窓会を行っています。卒後44年を経てほぼ現役を引退しています。今年は東日本大震災後2年を経過したので、震災視察をテーマにして同窓会を行いました。仙台駅に集合し、案内付きのバスで津波の酷かった名取市閑上（ゆりあげ）地区と荒磯海岸の視察をしました。家屋が壊され多くの方が亡くなっていますが、名取市の復旧は捗っていません。どうなるのでしょうか。

見学のあと豪華ホテル松島大観荘のオーシャンビューの温泉と景観を楽しみました。全員の近況報告で盛り上がり、まだまだこれからも楽しもうと一致

しました。翌日は松島組、中尊寺組、帰路組に分かれて行動です。黄金のジパング・平泉藤原京の素晴らしい浄土景観を楽しみました。更に一部は花巻・渋民村に足を延ばしました。幹事は8ヶ月間プランから実行まで5人で分担し円滑に進めることができました。

開催日時：2013年5月11日（土）—12日（日）

参加者：11名 志村和彦、須山盛行、佐々木仁、魚住洋、鈴木靖三、鈴木征四郎、手老省三、井上友昭、植田隆、本間昭弘、西嶋洋一（仙台幹事 手老、井上 横浜幹事 植田、本間、西嶋）

